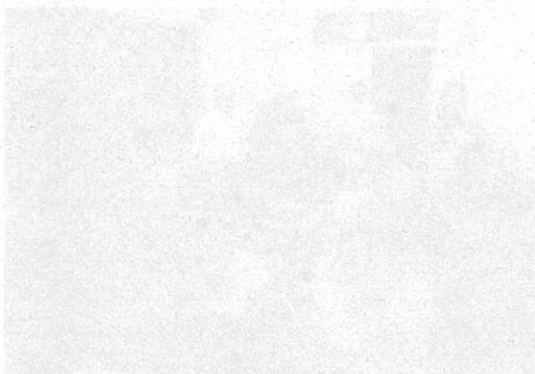


第Ⅱ部

城南区モニュメント調査報告



序章 モニュメント調査のあらまし 亀崎敦司(九州大学大学院人間環境学府博士課程)

ここでは、2011年4月から2013年3月までの2年間で開講された城南区歴史探訪講座(以下「講座」と記す)のうち、2年目に行われた調査について経緯や展開などあらましを述べたい。本調査は、城南区内での祠や堂、さらには庚申塔などの石造物や現代アート作品といった極めて広い範囲の「モノ」を対象にし、その分布や現存状況の把握を目的に行ったものであり、講座の受講者たちが路地を自らの足で歩くことによって得られた記録から成り立っている。なお、上記に挙げたような幅広い対象を含めたこの調査について、それぞれに込められた記念碑的な意図を考慮し、これ以降「モニュメント調査」と呼ぶことにする。

【調査までの経緯】

まず、本モニュメント調査に至る経緯から触れておきたい。2011年の開講当初から、2年計画の講座の1年目を「講義形式」で行うこと、そして2年目を受講者による「参加形式」で進めることが方針として決められており、さらに講座の最終年である2年目には学んだ成果を報告書として残すことが予定されていた。「講義形式」では、福岡大学の白川琢磨教授と桃崎祐輔教授を講師とし、それぞれ文化人類学、および考古学の専門的立場から充実した講義が行われていった。1年目の途中から講座に関わるようになった執筆者(亀崎、以下同様)は、主に2年目の「参加形式」の講座を任されることになり、その中身として何を行うかを計画することになった。

計画当初、受講者によって共同的な民俗調査のようなものができるかという構想を浮かべた。例えば、城南区内で行われている民俗行事について、2012年現在の記録に残すことを目標に、現地へ足を運んでその様子を観察したり、関係者へ聞き書きを行ったりなどしてはどうかと考えた。この構想に沿う形で、手始めとして受講者の中から希望者を募り、東油山で行われている粥占や提灯とぼしと呼ばれる民俗行事の見学、また田島八幡神社での田島神楽の見学などを行った。しかし、一般市民向けの講座にとって、このような民俗行事をただ「見学」するのと、その様子を細かく観察した上で記録に残そうとすることでは、技術的な観点から見て高い壁があった。とくに、あまりこうした調査の経験のない受講者にとっては、「報告書」として残す調査をすることは容易ではなく、何をすればよいか困っているようにも思われた。

このように当初の計画が必ずしも順調ではなかったこともあり、講座の2年目もしくは早くは講義形式を並行させつつ行うことになった(なお、考古学の分野では、講座1年次から桃崎教授より拓本取りの実習が行われるなどした)。ただ、1年目とは違い、毎回講義が終わった後に受講者から興味・関心のある分野や対象を聞くなどして、講師側と受講者側の意見交換を行った。この意見交換の場は、すぐに何を行うかという結論に至ったわけではなかったが、お互いに顔と名前を覚え、人となりがわかってくることで、講師側と受講者側との双方向的なやりとりが生まれてくる機会を提供することになった。また、お互いのことをよく知らなかった受講者どうしの間でも会話が生まれてくることになった。

このような意見交換を数回繰り返した後に提案したのが、大小の祠堂や石造物、さらに現代アート等の分布や現存状況を一定範囲の中で網羅的に調査する「モニュメント調査」である。本調査を提案するにあたっては、執筆者が2012年に刊行された『福岡市史 民俗編 春夏秋冬・起居往来』(以下『市史』と記す)の基礎的調査の際にこの調査法を経験したことがあり、おおよそのやり方がわかっていたことがあった。また、当初考えていた共同的な民俗調査が専門的な技術や知識を必要とする上に「ひと」を相手にする難しさがある一方、モニュメント調査ではやり方を教えればある程度の調査法は習得可能であり、「モノ」を対象にすることで比較的とりつきやすいはずであるとの見込みがあった。

調査では城南区全体を調査するため、作業量的に負担が大きくなることが想定されたが、数度の意見交換を通じて連帯感が生じつつあり、受講者間で作業を分担しつつ、うまく進められるのではという実感も芽生えていた。ただ、細部の進行方法に関してはこの時点でもまだ試行錯誤の状態にあり、必ずしも最終的な報告書までの展望が明確に開けていたというわけではなかった。



城南市民センターにて拓本取りの実習の様子。考古学の分野では桃崎祐輔教授により指導が行われた(2011年11月1日)

【城南区内の郷土史研究】

調査が開始されるまでの経緯に続いて調査開始後の展開を記す前に、城南区内の郷土史研究について触れておきたい。受講者が自ら路地を歩いて調査を行う前、事前準備として比較的近年に刊行された城南区に関する主に郷土誌からなる資料の収集を行った。これは、こうした資料の中には、モニュメント調査で対象にするような祠や堂、石碑等の記載があり、所在や由緒を参考にできるためである。市立図書館に所蔵されている資料の収集をはじめ、城南区内の小学校 11 校区ごとにある公民館を訪ねるなどした結果、1980 年代以降ここ 30 年ほどの間に多くの本や小冊子が刊行されていることがわかった。例えば、七隈校区では七隈郷土史研究会によって、1986 年に『七隈郷土史』が刊行され、片江校区では 2003 年に片江校区郷土史研究会編による『新風土記 かたえ』が刊行されている。また、別府校区では 1980 年に別府公民館から『別府郷土史研究 第 1 集』が刊行されて以来、1984 年に別府公民館創立 20 周年を記念して『創立 20 周年記念誌付 公民館 郷土の歴史』が刊行され、さらに 2004 年には公民館創立 30 周年記念の『別府のあゆみ』と続いている。これら郷土史研究の担い手たちは、上記の七隈校区のように地域の郷土史会等のグループを主体とするものや個人を単位とするものなどさまざまであり、また刊行のきっかけも定期的に公民館の創立記念として発刊されるものや、地域でかつて行われていた民俗行事を復活させるべく編まれた本など多種多様な様相を呈している。なお、城南区全体では、今回調べた限りで大小の本・冊子を含めて約 30 前後の資料を見つけることができた。単純に数の上では言う事ができないが、こうした資料からはこれまでに一定数のグループや個人が地域の郷土史研究を積み重ねてきたということが指摘できるだろう。

なお、郷土をめぐる研究は 2012・2013 年現在も進行中である。七隈校区では 1986 年に刊行された『七隈郷土史』の増補を目標に有志が活動中である。また、田島校区では 1879（明治三十）年に刊行された『田島沿革史』をめぐる定期的な勉強会が開かれている。さらに、別府校区では 10 年ごとの公民館創立記念に発刊され続けてきた記念誌の準備が、次回の 40 周年記念を目指して進行している。この他にも、例えば堤丘校区での活動など、校区によって少数のグループや個人で引き続き研究の蓄積が行われているということを開き及んでいる。

上に挙げたような資料は、今回の講座でモニュメントを訪ね歩いていく際に大変参考となっただけでなく、由緒や伝承など基本的な情報を得

る際にも参照にした。なお、第Ⅱ部中では、引用を行うたびに項目ごとの【参考文献】の欄に資料の名前を記している。

【調査開始後の展開】

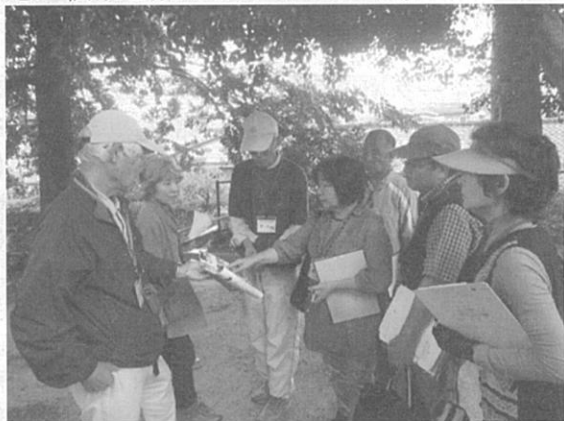
意見交換の機会や事前の資料調査などを経て、町歩きによる本調査が始まったのは 2013 年 10 月からである。調査のはじめとして、10 月 22 日から 26 日までの 1 週間（月曜から金曜）を「調査ウィーク」とし、午前と午後のほぼ丸一日、受講者が可能な限り参加して集中的に調査を行うことにした。これ以前には、口頭で作業の概要を伝えていただけで、まだ野外に出て実習を行ったわけではなかったため、まずは受講者全員でモニュメントの所在地を回ることにした。一日の段取りとしては、午前中に講座の会場である城南市民センターに集合し、何人かの受講者が運転する車に便乗してその日に回る校区まで行き、車を駐車してあとは所在地を順番に歩くという方法で行った。この町歩きの際には、こういったものを対象として記録してほしいか、また写真に撮る際の注意点などを伝えていった。例えば、初日に歩いた片江校区の阿蘇神社では、神社の社殿をはじめとして、境内末社や庚申塔などの石造物をもらさず写真に撮っていくように伝えた。この全体調査では、片江校区、南片江校区、七隈校区、堤丘校区、城南校区などで所在の判明していたモニュメントを回った。

調査ウィークでの全体調査の後には、受講者を七隈・城南・金山校区など区の西部を担当する「七隈班」と、片江・南片江・堤・堤丘校区など主に東部を担当する「片江班」の 2 班にわけた。班分けでは、できるだけ受講者の自宅に近いところになるように工夫し、全体調査後も時間を見つけて歩いてもらえるようにした。その際、班員ごとに分担地域の地図を渡し、その地図上をなぞるように路地を回ってもらった。執筆者は、各自の調査には一緒についていくことはなかったが、後に聞いたところによると各班全員で担当地域を回ったり、班内で 2 人 1 組になって一緒に回ったりして調査が進んでいたようである。

七隈班と片江班による班ごとの調査に移った後には、進捗状況の確認と写真データの受け渡しのために城南市民センターで定期的に集まる機会を設け、班ごとや班員ごとの情報交換ミーティングを行った。このときには、情報の共有を円滑に進めるためデジタルカメラによって撮影された写真データをプロジェクターでスクリーン上に投射して全員が見られるようにし、確認作業を進めていった。なお、この情報交換ミーティングを通じて、ある地区の担当者が何気なく見逃して

いた石造物が他の地区の担当者の指摘によって明らかになるなどして全体数が増え、情報の厚みが増すことになった。

10月の調査ウィークに始まり、数度の情報交換ミーティングを挟んで行われた「七隈班」と「片江班」による班ごとの調査は、2012年の年末にはほぼ完了した。この期間中の11月中には、油山の麓に膨大な数の石碑を有する片江風致公園（旧文学碑公園）内で、文学碑に限定した所在確認と写真撮影を行った（第Ⅱ部「12章 片江風致公園文学碑群」参照）。その作業内容は、既存の資料を参照に対象の文学碑を特定し、順番に写真を撮っていくというものであったが、このころには受講者間の連携が非常にうまくいくようになっていた。撮影役の執筆者が順番にスムーズに写真を撮れるように、次の文学碑を見つけて来る者、撮影の邪魔にならないよう文学碑の前の草をよける者、また撮影内容の確認をしやすいようにボードに仮番号をマジックで書きこむ者など、順調に作業は進んでいった。2013年の年が明けてからは、各受講者の「個人原稿」（第Ⅲ部参照）の提出やモニュメントの追加調査によって得られたデータの授受のため、城南市民センターに集まる機会を数回ほど設けた。最終的なモニュメントの数は、城南区内の90前後の場所において180ほどの個数を数えるまでに至った。



全体調査のはじめころ、片江校区の片江辻地蔵堂にて（2012.10.22）

【調査の資料的意義】

本調査の資料的意義について記したい。すでに触れた通り、この調査では『市史』（民族編、春夏秋冬・起居往来）による調査を手本としている。同書は、現在進行形で刊行されつつある巻の中でも資料性の高いものとして自らを位置づけているが、本報告書も2012・2013年現在の城南区のモニュメントの現状を記録することに重点をおいた。そのため、安易に全体化しようとする議論を避け、個々のモニュメントをただ順番に

ありのままに羅列していく記述をとっている。その上で、本調査による意義を挙げるとするならば、次の2点が挙げられる。まず、1点目は『市史』に記載された福博地域以外の調査を行ったことで、より広範な市域でのモニュメントの現存状況がわかったことである。2013年度早々には150万人に達すると見込まれる福岡市のベッドタウンとして、多くの団地や住宅が密集する城南区では、市の発展につれて田畑や丘陵、そして大小の池が姿を変えていった経緯がある。そこでは、マチ場としての福博地域と農村的様相を呈する城南区の性格の違いが明らかになるだけではなく、福博地域に隣接したこの地域がいかに福岡市の拡大とともに変容してきたか、その痕跡を読み取る上での基礎的なデータを提供することになるだろう。

2点目は、今回の調査によって既存のデータが最新のものに「更新」されたという点である。すでに触れたように、城南区では郷土史研究が盛んに行われており、今までに多くの郷土誌が刊行されている。これらには、モニュメントに関する記載があり、今回の調査を行うにあたって所在地や由緒を参照にしている。しかし、モニュメントはずっと変わらずにそこにあるのではなく、移動したり、消滅したり、あるいは増えたりするという流動的な側面を持つ。そうしたもののうちには、いつの間にかどこへ行ってしまったかさえわからなくなってしまうものも多い。現に、既存の資料に載せられたモニュメントのうちには、現在ほかの場所に移っていたり、建物が新しく建て替わっていたりするものがいくつか見られた。今までに刊行された郷土誌がかつてのモニュメントの様子を記録しているという点で重要である一方、今回の調査で2012・2013年現在の最新版に更新することにより、変わりゆくモニュメントの過程を辿ることができるという点で一定の貢献をなすと考えられる。

【受講者参加形式による意義】

今回の調査は、主に城南区在住の人々からなる講座の受講者によって行われた。その内訳は若い人でも60代前半であり、比較的年齢層の高い人々から構成されている。城南区に暮らした年数はそれぞれ異なるが、土地と縁のある人々によって行われた今回の調査では、加えられたモニュメントに特徴が見られる。地域に暮らす住民として受講者が参加して行われた意義について、エピソードとともに以下に2点記しておくたい。

まず1点目は、地域に暮らすことで得られた知識が、モニュメント調査に反映されている点である。事例でいうと、南片江校区の「油山団地」と書かれた大石が該当する。この大石は油山団地1

棟の入口付近に置かれているもので、外見的には単なる標識代わりの石に見える。実際に、撮られた写真を最初に見たときには、掲載から外すつもりでいた。しかしながら、写真の撮影者で同団地に住む受講者によると、この石は団地の造成当時に油山から持ってこられた石であり、さらに油山の形に似たものが選ばれているという。また、この大石の謂れは、団地内の住民であれば知っている人も多いということだった。

ここでは、石の謂れを聞くことで、油山団地の造成を記念するものであることがわかり、調査対象に加えた。ただし、こうした謂れを知らなければ、対象から除外していたはずである。何をモニュメントとして見るかは、調査する側によって暗に取捨選択が行われている余地があることを示しているとともに、地域住民の視角が取り入れられることで成果をより豊かにできるということが言えるだろう。

2点目は、目視による調査では見つけることができないような場所にある石造物を調査に加えることができたもので、七隈校区の「6.若宮神社跡の祠」がそれに当たる。今回の調査では主に町歩きを行い、目で確認できる範囲の対象を拾い上げていったが、モニュメントの中には必ずしも外から見えないものも多く存在している。例えば、ある校区で聞いた話であるが、もともと自宅の敷地内で通りに向かって立てられていた庚申塔を、防犯上の理由で外部から見えない敷地の中へ移動したという（本書未収録）。こうした目視による確認ができないものは、参考文献である郷土誌等の記録から抽出して場所を訪ねるなどしているが、記録に出てこないものは存在していること自体がわからない状態である。

事例として挙げた若宮神社跡の祠は、七隈の菊池神社に合祀されている若宮神社がもともと祀られていたとされる場所にあり、現在個人宅敷地内に安置されている。敷地の外からは見えない位置にあり、さらに樹木に囲まれているため容易に発見できない。この祠の存在についての情報提供は、本講座の受講者であり現在進行中の七隈校区の郷土誌編さんに関わるメンバーによって行われた。祠のある家とは比較的隣に自宅があるこの受講者によると、本講座が始まる前に地区の郷土史研究を通じて祠の存在を知っており、すでに祠の所有者のもとを訪ねて祀るようになった経緯を聞くなどしていたという。

さて、1点目と2点目を比べるとどちらも地域の住民である受講者によって情報提供が行われたが、1点目が団地に暮らすことで自然と伝わってくる知識をもとにしているのに比べ、2点目は郷土史研究を通じて得られた知識であり、やや性

格が異なっている点が指摘できるだろう。このような知識は、外部からの調査者でも長く綿密なフィールドワークを行うことで、得られる情報かもしれない。しかし、地域の住民が加わり、調査者であるとともに有力な情報提供者になることで、すぐに有益な情報が得られる側面もあると言えよう。城南区という広がりでは、彼らもまた限定された一地区の住民にすぎず、受講者が参加していない地区との間に情報量の厚みの差が生じている可能性も考慮しなければならないが、地域住民でもある受講者の参加は成果を豊かにするという点で一定の意義があったと考える。

【記憶の喚起－調査中の出来事から】

本モニュメント調査の際中、執筆者にとって印象が強かった出来事について触れておきたい。それは、全体調査での町歩きの際やプロジェクターを使つての報告会の場などで、モニュメントやそのモニュメントのある場所に関わる記憶が次々と受講者の口をついて出たことである。ここではそうしたもののうち、片江風致公園（旧文学碑公園）にまつわるエピソードを紹介したい。11月の小春日和の日に、受講者とともに同公園へ文学碑の現状把握と写真撮影のために訪れた時の話である。午前中に写真撮影まで一段落がつき、近隣の公民館へ移動して昼食のお弁当を受講者といっしょに食べているとき、ある年長の受講者（Aさん）から「独身のころ、後に奥さんとなる人とあそこでデートをしりました」と、若いころの思い出話をいかにも恥ずかしそうに打ち明けられた。他の受講者もまた肅々と聞いていたが、この話が一段落するとAさんより若手の受講者（Bさん）からは「そういえば、（旧）文学碑公園の上の方では、岩の上を飛び越えてモトクロスしよるバイクが大勢いた」という発話がなされた。Bさんと同年代くらいの受講者の中には、反応して頷く受講者がいたり、同様の思い出話を始めた人もあった。そして、この話も一段落すると、さらに続いて同公園の近隣に住む受講者（Cさん）からは「最近あった洪水では、山崩れが起きてお寺の下の方まで泥水が流れ出てきて大変だった」という話が始められた。片江風致公園をめぐる受講者間で次々になされた会話は、また別の機会では場所や対象を変え、一旦始まると堰を切ったかのようにとまらなくなることがあり、ときにその場所とは直接関係のないような特定の個人や場所にまで派生することもあった。ここからは、モニュメントを調査するという行為自体が当人たちに記憶を喚起する機会を与えているともいえるだろう。モニュメント調査の一側面として、ここに記しておきたい。

【問題点や課題】

本調査ではまた、問題点や課題も多く挙げられる。資料的水準の問題については後の「調査方針と凡例」で述べることにし、ここでは講座の進め方の上での問題点を2点挙げたい。

1 点目は、経緯に記したように、「講義形式」から受講者による「参加形式」への転換にかなりの時間を要するなど、モニュメント調査までの段取りがうまくいかなかったことである。10月のモニュメント調査がスタートしてからは割合スムーズに進めることができたものの、そこに到るまでに何回も意見交換を重ね、なかなか進まない調査に焦慮する人もいたのではないかと推察する。今回の講座が、「講義形式」と「参加形式」という特別な講座の形態で進められたことと、講座を任された執筆者にとって、後者に関しての経験やノウハウの不足が原因だと指摘できるが、当初から全体的見通しをより綿密に立てておく必要があったように考える。

2 点目は、モニュメント調査で一定の意義があったとする反面、この調査が果たして受講者のニーズに応えられたかという問題である。これは、受講者の数の推移から見たときに浮き上がる問題である。初年度の講義形式のときには30名前後の人が参加していたものの、次年度の参加形式になると徐々に数が減っていき、最終的にモニュメント調査に加わった人は10名あまりに減った。当初多くの受講者が城南区の民俗や歴史に興味を示していたのにも関わらず、大きく数を減らしてしまったのには、聞くことがメインの講義形式から、調査者として加わる参加形式への転換が、自分の手には負えないほどのステップアップだと受け取られてしまったことも考えられるだろう。また、モニュメント調査自体がすべての受講者に受け入れられなかったということも原因の一つとして挙げられる。いかに受講者のニーズに沿った講座を行うかが問われているが、上記の点は今後の同様の講座が開かれるための課題点として挙げておきたい。

【小括と展望】

以上が、本調査のおおよそのあらましである。講義形式から参加形式への移行の難しさ等の問題を抱え、また受講者に負担をかけることもありながらも、何とか調査を終えて成果を報告できる段階まで来ている。これは受講者一人一人の尽力によるところが大きいですが、計画段階で見込んでいたように、調査法を教えることで一般の人々でもある程度の調査が可能である点、さらに「七隈班」と「片江班」にわけて作業を分担しつつ、上手に区内をカバーできた点などがうまく機能したと

言えるだろう。さらに、地域住民ならではのモニュメントに対する知識や見方が、資料の質や量を豊かにすることができた点などは、当初想定していなかった思わぬ収穫として挙げることができる。

最後に展望を2点述べたい。1 点目は、本書がさらなる研究のために利用されることである。今回の調査では「モノ」に焦点を当てたが、そこには必ずこれを祀ったり、顕彰したりするひとの姿がある。「聞き書き」などの調査法を取り入れつつ、人類学や民俗学、そして歴史学など関連する研究領域に貢献するとともに、地域に還元される研究につながれば幸いである。次に2 点目は、本書が町づくりや健康増進等のために有効に活用されることである。例えば本書に載せられたモニュメントを巡る町歩きなどが考えられるだろうが、ボランティアの協力を得て行く先々の歴史や由緒の説明を聞きながら回ったり、モニュメントの写真撮影を主要な目的として回ったりすることで、異なる興味・関心をもつ人に対応することもできるだろう。こうした両方の点に関しては、今後とも福岡大学と城南区、そして地域との間でさまざまな企画が立ち上がっていくことを切に望む。



菊池神社にて、宮司の大谷華代子氏（写真最右）より神社の由緒等の話を聞く（2012.10.23）

調査方針と凡例

調査の主眼：

すでに述べた通り、本モニュメント調査は市民講座の一環として城南区内や近隣に在住する人々を中心にして始められたものである。そこでは『市史』を一つの手本としたが、特に専門的知識や技術が求められる点では、情報が不足している箇所が認められる。限られた人的能力や調査期間の上で、本調査が最も重点を置いたのは、2012年から2013年現在の城南区において「どこに何があるのか」という最もシンプルで基本的な情報を明らかにすること、そしてその場所を再訪可能な状態にまとめ上げることの2点である。こうした方針の下、一か所についての情報量は必ずしも多くはないものの、一定の資料性を確保することを目指している。

調査範囲：

調査の対象としたのは福岡市城南区全域である。城南区は、1982（昭和五十七）年に当時の西区が、西区・早良区・城南区の3区に分割されたときに発足した。調査範囲としての城南区という区切り方は、この講座が福岡大学と城南区の連携事業に基づくものであることによるが、特に城南区に関係したり、城南区との境に隣接したりしているものは、対象として含めている場合がある（例：11章 城南校区の「9.天照皇大神」など）。

対象に含めたものと含められなかったもの：

今回掲載の対象にしたものは城南区内の神社、祠、堂、庚申塔などの石造物、さらには現代モニュメントなど、少しでも記念碑的な意図が見受けられるものを広く取り上げた。その対象範囲の広さは、地域で親しまれている「黄色い郵便ポスト」や川沿いに点々と見いだせる「水道管理設標柱」、さらには「太閤道」や「水道みち」といった道路にまで及んでいる。

一方、本来取り上げるべきだが、対象に含めることができなかったものでは、仏教寺院に代表される神社以外の宗教的施設、およびその中に含まれるモニュメント等が挙げられる。このうち寺院には、敷地内に大小の堂や祠をはじめ、記念碑、さらには土地にゆかりのある人物の墓碑など、多くの対象が存在することが見込まれた。しかし、調査の初期段階で全体数がかなり増えることが予想された上、寺院を含めて網羅的に調査するには時間的・労力的な余裕がどうしても見いだせなかったため、今回は調査の対象から見送ることにした。

また、一か所に多くの調査対象を含む場所につ

いても、すべてを網羅できたとは言い難い。神社を例にすると、境内に祀られている祠、堂、庚申塔をはじめ、石碑等については漏らすことのないようなものの、鳥居や旗竿台、灯籠、狛犬などの石造物等からなる「記念設備」に類する対象については、ほぼ今回の調査からは漏れている。

凡例：

基本的に『市史』を参考にした。掲載は、城南区の校区ごとに章としてまとめ（全11校区＝全11章）、最後の12章には1か所に多くの調査対象を含む「片江風致公園内文学碑群」をあてている。

【項目名】

項目名は法人名や通称、あるいは対象物の形状・内容等から選択した。石碑などの碑文から項目名としてもものは、引用の部分を「」で示した。また、同一敷地内に多くのモニュメントを内包する神社、公園等については項目名を□□神社や△△公園といった名称で記し、その中の小項目として○で囲んだ数字（①、②、③…）で始まる各モニュメントの番号を振っている

【所在地】

対象物の所在については、各章の最初の地図上に項目番号で示した。また、項目ごとの所在地欄には、城南区〇〇から始まる位置情報に加え、補足事項（例、「□□交差点付近」、「△△橋もと」等）を適宜記載した。

【概要】

対象物の由緒・来歴・形状・補足事項等を簡略に記した。本報告では、地域で発行された郷土誌関係の本から多く引用を行っているが、そのまま引用した箇所は「」でくくり、また参考とした文献、および引用ページはその都度（）で示している。

【境内祠堂等】

神社やその他の施設の敷地内にある祠・廟・堂、および石碑や庚申塔、その他の様々なモニュメントを列記している。このうち、○で囲んだ番号を振ったものは、小項目（①、②、③、④…）として同一項目の下位に位置づけて記載している。

【碑文等】

碑文、説明板その他の文字を記載した。碑などの記念設備が項目内に複数ある場合は、記載対象に*と番号を付して対照出来るようにした。また、対象物のどの位置に文字が記載されているかを[]で示した。

【参考文献】

【概要】等で引用した参考文献を挙げている。なお、第Ⅱ部末に参考文献一覧を付している。

【写真】

項目ごと、さらに小項目(①、②、③…)として番号を振ったものに関しては、可能な限り写真を掲載している。このとき、撮影日を必ず入れるようにし、2012年から2013年までのいつの時点での状態かがわかるようにしている。また、対象物の近くにある他の対象物や、後に探し当てるための目印となるような建物・商店・道路等と対象物との位置関係がわかるように、「写真に向かって〇〇方向に□□がある」といった表現で説明を加えている場合がある。

調査者(受講者):

城南区歴史探訪講座の受講者のうち、以下の計13名が本モニュメント調査に携わった。

内田義弘
内村敬二
梅林孝雄
大久保實
熊丸博英
桑原昌子
佐座直彦
紫垣義憲
菅間一公
松本美重子
宮本いつ子
山崎博教
渡 久恵

(敬称略、あいうえお順)